

研究発表

「高度経済成長期の映し鏡」

「砂の器」の「方言」と「標準語」

日本大学教授 田中 ゆかり



「砂の器」は、松本清張の初めての全国一般紙である読売新聞夕刊での連載小説で、方言研究ではよく知られた類似する言語的特徴が離れた土地に分布するということを、ミステリーのミスリーディングのツールとして使った作品として知られています。

ミステリーの肝であるミスリーディング形成のポイントは、蒲田駅の殺人事件の関係者と思われる人たちが「ズーゾー弁のような言葉」で話をしていったという証言に凝縮されています。

蒲田駅は東京にあり、東京は東日本方言域であるため、ズーゾー弁と言えば東北弁という方言ステレオタイプに根差すミスリーディングから「砂の器」は始まります。しかし、東北方言と雲伯方言には、共通点もありますが、異なる点もあります。このあたりを清張はどのように描いたのか作中の登場人物の台詞に付与された言語的特徴を抽出し、それが現実の方言分布や方言的特徴と合致しているのかどうか、簡単に確認をします。まず、被害者の三木謙一は「東北弁のような言葉」を話す登場人物として造形されています。その言葉には「東京弁ではないアクセントがあった」とか、「東北の方だと思った」「濁音の多い訛りが耳につく」「ズーゾー

弁」と目撃者らは警察に証言します。三木の実際の台詞にこの三つの特徴が反映されているかといえば、アクセントは活字では確認できない事象なのでおきませんが、「ズーゾー弁的特徴」は、三木の台詞から一例をあげると「こんな嬉しいことはない」のように反映されています。他方、「濁音の多い訛」とは、単語の中の清音が濁音化する語中有声化現象を指すと思われるのですが、その現象が生ずべき箇所が同じ台詞にあります。その特徴は反映されていません。語中有声化の特徴をもつ方言であれば、「嬉しいことはない」の「こと」は「ゴト」となりますが、表記は清音のままです。

三木に与えられた台詞に反映された言語的特徴に注意を払うと、三木の話している方言は東北方言ではなくじつは雲伯方言だとの種明しになっています。しかし、証言者には三木の言葉は「濁音の多い訛り」だと言わせている。これは、清張が意図的に仕組んだ東北方言へのミスリーディングであり、方言的知識が深い人物が三木の台詞を注意深く読めば、早くもここで「答え合わせ」ができる仕組みになっているとも言えます。

「砂の器」が執筆された1960年代初頭には、現代方言研究の基盤が形成され、その成果が広く公開された時期と重なります。「砂の器」は、執筆当時次々に公開された新しい方言研究の成果を吸収しながら書かれたということが強く想像されます。清張はもともと方言に関心を寄せるタイプの作家ではありますが、「砂の器」で方言由来のミスリーディングツールを取り入れた背景として、高度経済成長期が日本語社会における方言意識の高まった時代であったことは見逃せません。「ことばに関する新聞記事データベース」(国立国語研究所)を用いて5年刻みに「方言」に関連する記事数の推移をみると、「方言」に関する記事数が飛躍的に増えるのが、1965年から69年で、高度経済成長期の末期と重なります。内容面では「方言自殺・方言殺人」にまつわる記事や投書が非常に多く、当時「方言ステイグマの時代」であったことも分かります。

一方、新聞連載小説の主要登場人物に方言が与えられはじめるという現象がこの時期に生じます。このことは、「砂の

器」をそういった高度経済成長期の方言意識を投影した「方言新聞連載小説」の一つとして捉え直すことが可能だということの意味します。

「砂の器」は、作中の登場人物である和賀英良にとって隠したい過去を知る三木謙一にはステイグマとしての方言が、過去を書き換えた男である和賀にはステイグマを覆い隠す「疑似標準語」が与えられています。連載当時は、方言が自分の出生・経歴と固く結びついた「恥ずかしく・隠したい」ステイグマの象徴であったことを巧みに使っています。「砂の器」は、多くの人には具体的にはよく知られていない方言である雲伯方言と、まだ広くは知られていない方言的知識ならびに東日本方言の方言ステレオタイプを用いた高度経済成長期の「陰(隠したい過去、ステイグマ)」を映した「方言新聞連載小説」と言えます。

主人公格に方言が与えられた同時期の新聞連載小説には、司馬遼太郎「竜馬がゆく」(1962~66年、産経新聞夕刊)や川端康成の「古都」(1961~62年、朝日新聞朝刊)があります。「竜馬がゆく」の「土佐弁」は、高度経済成長期の「光(故郷を背負う「青雲の志」)」を、「古都」の「京都弁」は失われてゆく「美しい日本」の象徴であるという指摘をして、締めくくりとします。